

医者も知らない、平穩死



連載⑤

大腸がんの全身転移が見つかった看護師のK子さん(50)は、現役時代は在宅医療に反対でした。

でも、亡くなるまでの2カ月半の日々を過ごすのにK子さんが選んだのは、在宅療養。「自宅は最高の特別室や」という言葉を何度も私におしやっただのが、強く記憶に残っています。

K子さんの部屋には、ご家族や友人が折った千羽鶴、友人たちからの絵ががき、親しい人たちと

病院では「問題児」。でも在宅では「優等生」

写した写真が飾られ、私も訪問診療の合間に和やかな時間を過ごすことができました。天気の良い日にはご主人と外を散歩。K子さんの近くにはいつもご家族や友人がいました。

ある患者さんは、亡くなる1カ月半前にご家族と温泉旅行に。「日本酒も飲んでしまっせん。ちよっとやけど、気持ちよくて酔っばらっしてしまっただわ。お刺し身おいし

〈長尾和宏〉長尾クリニック院長・日本尊厳死協会副理事長・著書に『平穩死』10の条件」など。



(写真はイメージ)

つたでええ(笑)ながら、しかし入院生活では、旅行先で撮った写真を何こういっただことは不可能かも知見せてくれました。です。在宅医療で、最後

亡くなる1カ月前に結婚の最後まで楽しんで「生婚50周年を祝って、ご自活」をされる人をたくさん見ています。だからこの夫婦もいました。ご主人は末期がん。ご家族が病気を治してもらったり友人、近所の親しい方々、訪問診療で伺っている看護師などがご夫婦から招待を受けました。在宅医療のよさは、最

私も短時間でしたが、後まで尊敬ある「生」を笑顔を出しました。だれがしめること。病院では規あの光景を見て「末期が則を守らない問題児」ごんのご主人と奥さんの結婚記念パーティー」だと自分の生を榮しめる「優思つてしょうか。笑顔が等生」になれるのです。(火曜掲載)